

エコクリティシズム研究学会

事務局便り No.2 July 2013

第 26 回エコクリティシズム研究学会大会特集号

ご 挨拶

エコクリティシズム研究学会は、研究会発足から来年でちょうど 20 年目にあたります。人間でいうと成人式の年で、これからやっとな大人として社会に船出し、試練にも会うということですね。

皆様とご縁がありここに集い、学会として大会を開催できますのも、事務局のみなさまの御奉仕、編集委員のみなさまの奮闘、またその他の役員や会員の皆様のご協力と、日々のエコクリティシズム研究の精進のおかげです。この 20 年はまたエコクリティシズムの日本への移入と発展、展開と重なります。ここに大会プログラムと『エコクリティシズム・レビュー』No.6 をお届けします。

今回は大会実施に当たり、広島修道大学と塩田会員、谷岡会員に多大なご協力とご援助をいただきますことを厚くお礼申し上げます。また特別講演のために 8 月 6 日を迎えた広島に、ご遠方からお越しいただく村上清敏先生には、心より感謝申し上げます。大会の成功と学会の発展を希って、簡単ですがご挨拶とさせていただきます。

(学会代表・伊藤詔子)



レジメ (発表要旨)

2013 年 8 月 10 日 (土)

研究発表 11 時 40 分—12 時 40 分

1. 「イタリアにおけるホーソーンの風景論」

稲富百合子 (福岡大学)

『フレンチ・アンド・イタリアン・ノートブックス』には、ホーソーンがイタリアで目にした様々な風景が詳述され、アメリカの風景との比較を通してこの作家の内面世界が表出されている。このイタリア体験が存分に活かされたのが、彼の最後の作品『大理石の牧神』である。本発表では、この二つの作品のイタリアの風景を考察し、ホーソーンがこの旧大陸の風景をどのように捉えていたかを明らかにすることで、作家の心象風景に迫りたい。

2. “New Eden: Postapocalyptic Ecotopia in Atwood’s *Oryx & Crake* and *The Year of the Flood*”

デビッド・ファーネル（福岡大学）

This presentation will explore the post-apocalyptic, post-human ecotopian society of the Crakers as depicted in the first two novels of Margaret Atwood's *Maddaddam Trilogy*, and its implicate criticism of modern human society.

特別講演 13時30分—14時30分

「ロバート・フィンチの『鯨のように』再読」

村上清敏先生（金沢大学）

ロバート・フィンチの「鯨のように」（拙訳『ケープコッドの潮風』（松柏社）所収）を取り上げ、この作品が、エクリチュールの問題そのものを顕在化させた、ネイチャーライティング（旧い呼称となりました！）の典型である点を指摘した後、『白鯨』の（誤読を恐れぬ）エロチックな読みを披露する。

シンポジウム 14時40分—16時40分

「メルヴィルと環境」

司会：藤江啓子（愛媛大学）

メルヴィルはいわゆるネイチャーライターではない。しかし、海やグレイロックをはじめとする山、あるいは南海の島々の風景を描いた。彼の生きた時代19世紀中葉はアメリカにおいて産業資本主義の確立期であり、すでにその弊害としての環境破壊が顕在化していた。メルヴィルはそのことを意識し、自然環境を称え、先住民が自然と共生していたことを評価し、女性や黒人が劣悪な環境に置かれたことを告発し、作品に表した。

「『ピエール』の古層——ジョセフ・ブラントとモーリー・ブラント」

講師 大島由起子（福岡大学）

『ピエール』では、イザベルに出会う前から、それを予兆するかのように、サドル・メドーズの松の木に謎の女性の顔が現れてピエールに訴えかけていた。今発表では、その松をイロコイ連邦の松と読む可能性を、英米ふたつの世界をまたにかけて動いたモホーク族のリーダー、ジョセフ・ブラントと、その姉モーリー・ブラントに注目しつつ検討する。一見すると甘美な風景の古層を探ることで、メルヴィルが抱く国家観を論じられればと願っている。

「水夫と黒人の環境——『ビリー・バッド』を中心に」

講師 辻 祥子 (松山大学)

メルヴィルは遺作『ビリー・バッド』の冒頭で、かつて皆から「花の水夫」と称えられていた黒人のリーダーを語り手に想起させたかと思うと、生粋のアングロサクソンの血を引くはずの平水夫ビリーに黒人奴隷のイメージを与え、自由を奪われた姿を強調していく。それによって、階級差別のもつとも厳しい軍艦内にとどまらず、人種差別が深刻さを増す当時のアメリカ社会全体を批判している。

一方で、水夫がその仲間や船長と平和的に結びつく最終場面は、黒人をはじめとした被支配者たちの横の連帯が実現し、さらに彼らと白人支配者との間の和解が成り立つ理想を描いているとも解釈できる。水夫の環境と黒人の環境、白人水夫ビリーと黒人像の接点を探りたい。

「環境の見方を記録するイシュメール」

講師 藤本幸伸 (山口大学)

登場人物としてのイシュメールは早々と物語から退場して、語り手役に徹する。この傍観者的な物語への関わりによって、イシュメールはエイハブをはじめとする人々が自然をどのように見ているかを記録することが可能になった。エイハブ、スターバック、スタップ、クウィークェグ、タシュテゴ、船大工などの自然（鯨を含む）への眼差しとその背後の世界観・人間観を探りだしていく。

「『乙女たちの地獄』に見る労働と環境」

講師 藤江啓子

『乙女たちの地獄』は産業革命により、機械化された製紙工場での女性労働者の苦境を作品化したものであり、キャノン作家によって書かれた最初の工場文学である。産業資本主義初期における労働者の仕事場を取り巻く環境問題、すなわち、汚染、安全、健康、衛生、貧困、労働時間、ジェンダー、性の不毛について、時代背景や社会背景を鑑みながら考察する。さらに「白さ」についての考察を行い、自然の白さと人工の白さ、製紙工場が「白塗りの墓」と呼ばれることについて考察する。

~~~~~

## ☆ご報告☆

### 編集委員会より

執筆者と編集委員会のご尽力で『エコクリティシズム・レビュー』No6 が仕上がりお届けします。今号の内容と新機軸は編集後記に書きました。12月の申し込み、2月末の原稿提出、初校、再校、念校と原稿修正を重ね、入稿は6月7日でした。今号は絵が多くお楽しみください。執筆者のみなさまには去年より一冊買上げのご協力もいただき、重ねてお礼申し上げます。

ご意見はNo6 編集委員会(委員・伊藤、大野、真野、三重野)までご自由にお寄せ下さい。No7にも奮ってご投稿をお願いいたします。

## 事務局より

[新入会員のご紹介] (50音順、敬称略)

お二人の大学院生のご入会がありましたので、研究テーマをご紹介します。

原田和恵(ワシントン大学セントルイス 東アジア言語文化学部大学院博士課程在学中 PhD.candidate)

研究テーマ：日本SF女性作家の作品の中で、サイボーグ、ハイブリッド、境界線上にある身体におけるジェンダーの表象を考察する。特にクイア、両性具有、シュミレーション、ジェンダー・パフォーマンス、生殖について分析する。

山根 祥子(九州大学大学院比較社会文化学府 国際社会文化専攻 博士課程後期2年在学中)

研究テーマ：外国文学が日本に移入される際に起こる「ねじれ」の一考察として、博士論文では19世紀フランスの作家アルフォンス・ドーデを取り上げている。ノスタルジーの共感という視点を踏まえつつ、作品分析及び移入過程のドーデ像の変遷などの研究を行っている。

[ジャーナルの展示販売について]

音羽書房鶴見書店様より、本学会のジャーナル『エコクリティシズム・レビュー』を学会の展示場で販売してもらうことになりました。多くの研究者の目に触れるようになりますので、たくさんの研究論文のご投稿をお願い致します。

[来年度大会について]

来年度2014年大会は8月上旬(9日が第1候補)に関西地区で開催予定です。ワークショップ、研究発表の希望者は浅井副代表(c-asai@cs.kinran.ac.jp)までお申込み下さい。

締め切り： 本年12月末

## ☆☆環境にやさしい学会開催を目指して☆☆

本学会では環境にやさしい学会を目指して、大会でも紙を減らし、資源のリサイクルを心がけています。この事務局便りと『エコクリティシズム・レビュー』No6は、大会と総会資料ともなっていますので、必ずお持ちください。またご用意のハンドアウト50部は、余部を著者がお持ち帰りになり、裏を再利用などしてください。よろしくおねがいします。

では7月21日の講演会、8月9日～10日の大会でお会いしましょう。詳しくは以下。

<http://ns1.shudo-u.ac.jp/~shiotah/ecoc.html>

2013年7月10日 エコクリティシズム研究学会事務局発行

エコクリティシズム研究学会 代表 伊藤 詔子

事務局 〒738-8504 広島県廿日市市佐方本町1-1 山陽女子短期大学 水野敦子研究室

E-mail: mizuno@sanyo.ac.jp

〒739-0321 広島市安芸区中野6-20-1

広島国際学院大学 平瀬洋子研究室

E-mail: danbara@mpd.biglob.ne.jp